福岡市埋蔵文化財調査報告書　第500集

那　珂　17

－那珂遺跡群第55次、第56次調査報告－

1997
福岡市教育委員会

序

九州の中枢都市福岡は古くより大陸との交流の場としての役割を果たしてきました。そのため、市内には数多くの遺跡が分布しています。なかでも博多駅南側には那珂遺跡などの「奴国」の拠点集落が発見されています。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は那珂遺跡第５５次調査、第５６次調査の成果を報告するものです。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表す次第であります。

平成８年11月22日

福岡市教育委員会

教育長　町田英俊

本　文　目　次

第1章　第55次調査の記録
はじめに ……（加藤隆也） 1
調査に至る経緯 …… 1
調査の組織 …… 1
概　要 …… 1
調査の記録 …… 2
1）掘立柱建物（ＳＢ） …… 2
2）土坑・土壙（ＳＫ） …… 3
3）井戸（ＳＥ） …… 5
4）溝（ＳＤ） …… 8
5）柱穴（ＳＰ） …… 10
6）遺物包含層 …… 10
まとめ …… 10

第２章　第56次調査の記録
Ⅰはじめに ……（大庭康時） 11
1.調査にいたる経緯 …… 11
2.発掘調査の組織と構成 …… 11
Ⅱ発掘調査の記録 …… 12
1.発掘調査の方法と経過 …… 12
2.調査の概要 …… 14
3.遺構と遺物 …… 14
（1）溝状遺構 …… 14
（2）掘立柱建物跡 …… 16
Ⅲまとめ …… 20

挿　図　目　次

第55次調査

Fig.1　那珂遺跡群第55次調査地点位置図（1／500） …… 2
Fig.2　那珂遺跡群第55次調査遺構配置図（1／100） …… 折り込み
Fig.3　ＳＢ－01、02実測図（1／60） …… 4
Fig.4　ＳＫ－01、02、03、04、05、06実測図（1／40） …… 6
Fig.5　ＳＫ－07、08、10、12、13、14、15実測図（1／40） …… 7
Fig.6　ＳＥ－01実測図（1／40） …… 8
Fig.7　ＳＤ－05断面実測図（1／20） …… 8
Fig.8　出土遺物実測図（1／3） …… 9

第56次調査

Fig. 9　調査地点位置図(1／1,000) …… 12
Fig.10 遺構全体図(1／100) …… 13
Fig.11 溝１土層実測図(1／40) …… 14
Fig.12 溝２土層実測図(1／40) …… 15
Fig.13 溝状遺構出土遺物実測図(1／３) …… 15
Fig.14 １号掘立柱建物跡(1／100) …… 17
Fig.15 ２号掘立柱建物跡実測図(1／40) …… 18
Fig.16 ３号掘立柱建物跡実測図(1／40) …… 19
Fig.17 柱穴出土遺物実測図(1／３) …… 19

図　版　目　次

第55次調査

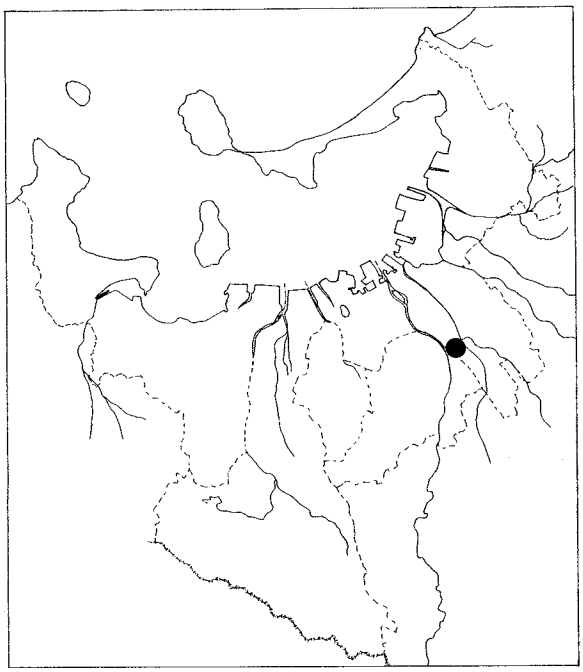
ＰＬ．１　１.第５５次調査西側調査区全景（東から）
２.第５５次調査東側調査区全景（西から）
ＰＬ．２　１.ＳＫ－０１完掘状況（北から）２.ＳＫ－０２検出状況（東から）
３.ＳＫ－０３検出状況（西から）４.ＳＫ－０６完掘状況（南から）
ＰＬ．３　１.ＳＫ－０７検出状況（西から）２.ＳＫ－１３完掘状況（南から）
３.ＳＥ－０１完掘状況（東から）４.ＳＤ－０５完掘状況（西から）
ＰＬ．４　出土遺物
Ｐｈ．１　作業風景

第56次調査

ＰＬ．５　１.第５６次調査全景（南西から）２.第５６次調査全景（北から）
ＰＬ．６　１.溝１完掘状況（北から）　２.溝１土層堆積状況（北から）
ＰＬ．７　１.溝２完掘状況（西から）　２.溝２土層堆積状況（東から）
ＰＬ．８　１.溝２底柱穴状遺構（東から）　２.溝２底柱穴状遺構（北東から）

那珂遺跡群

－第５５次調査－



遺跡調査番号　９５５３
遺跡略号　ＮＡＫ５５

例　言

1．本章は、１９９５年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した那珂遺跡群第55次調査の報告書である。調査の担当者は加藤隆也である。

2．本章に使用した遺構の実測は加藤隆也が行い、遺物の実測図は加藤、入江のり子が行った。製図は加藤、入江が行った。

3．本章に使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。

4．遺構の呼称は記号化し掘立柱建物をＳＢ、土坑（土壙）をＳＫ、井戸をＳＥ、溝をＳＤ、柱穴をＳＰとした。

5．本章で用いる方位は全て磁北である。

6．本章の執筆は加藤が行った。

7．本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	９５５３		遺跡略号	ＮＡＫ－５５	
調査地地番	博多区竹下５丁目379,380,383番			分布地図番号	塩原３８
開発面積	938.71㎡	調査対象面積	938.71㎡	調査実施面積	530㎡
調査期間	1996年２月13日～３月28日				

第1章　第５５次調査の記録

はじめに

調査に至る経緯

1995年８月25日、川邊ミユキ氏、野中五郎氏から本市に対して博多区元町竹下５丁目379･380･383番における共同住宅の建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの那珂遺跡群の南側に位置し、申請地の東側には第22次調査が位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1995年12月26日に試掘調査を実施した。現況は宅地であり、調査の結果、地表土直下のローム層上面にて遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積938.71㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1996年２月13日～同年３月28日まで行った。

調査の組織

調査委託　川邊ミユキ、野中五郎

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛（前）　町田英俊（現）

調査総括　文化財部長　後藤直
埋蔵文化財課長　荒巻輝勝
埋蔵文化財課第２係長　山口譲治

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　内野保基　西田結香

調査担当　埋蔵文化財課第２係　加藤隆也

試掘調査　山崎龍雄　池田祐司

調査作業　池田省三　大谷政道　木原保生　齋田秀平　古林茂夫　野田淳一　羽岡正春
早川章　平井武夫　福田軒夫　山口熊孟　山田孝允　加集寛隆　松藤暢邦（九州大学）
有田恵子　泉本タミ子　岩本三恵子　澄川アキヨ　田中トミ子　藤幸枝　中川原美智子
中村フミ子　西山径子　播磨千恵子　福場真由美　藤野トシ子　北条こず江　水田ミヨ子
寺嶋道子

整理作業　入江のり子　加集和子　山本良子　寺嶋道子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主をはじめとするみなさまには多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

概　要

調査地の現況は宅地であり、排土を地内で処理するため、まず調査区西側半分の表土を剥いだ。遺構面は南側へ緩やかに傾斜しており、台地の端を確認するため拡張トレンチを南側に設定した。西側の調査においては土壙、溝、柱穴、ピット状遺構などを調査した。西側調査終了後ひきつづき東側の調査を行った。地形は西側と同様であるため、同じく拡張トレンチを設定した。検出遺構は井戸、溝、土壙、土坑、柱穴、ピット状遺構などである。最後に、調査区南側に溝の存在が想定されたため、３本のトレンチを設定して検出作業を行ったが溝は確認されなかった。

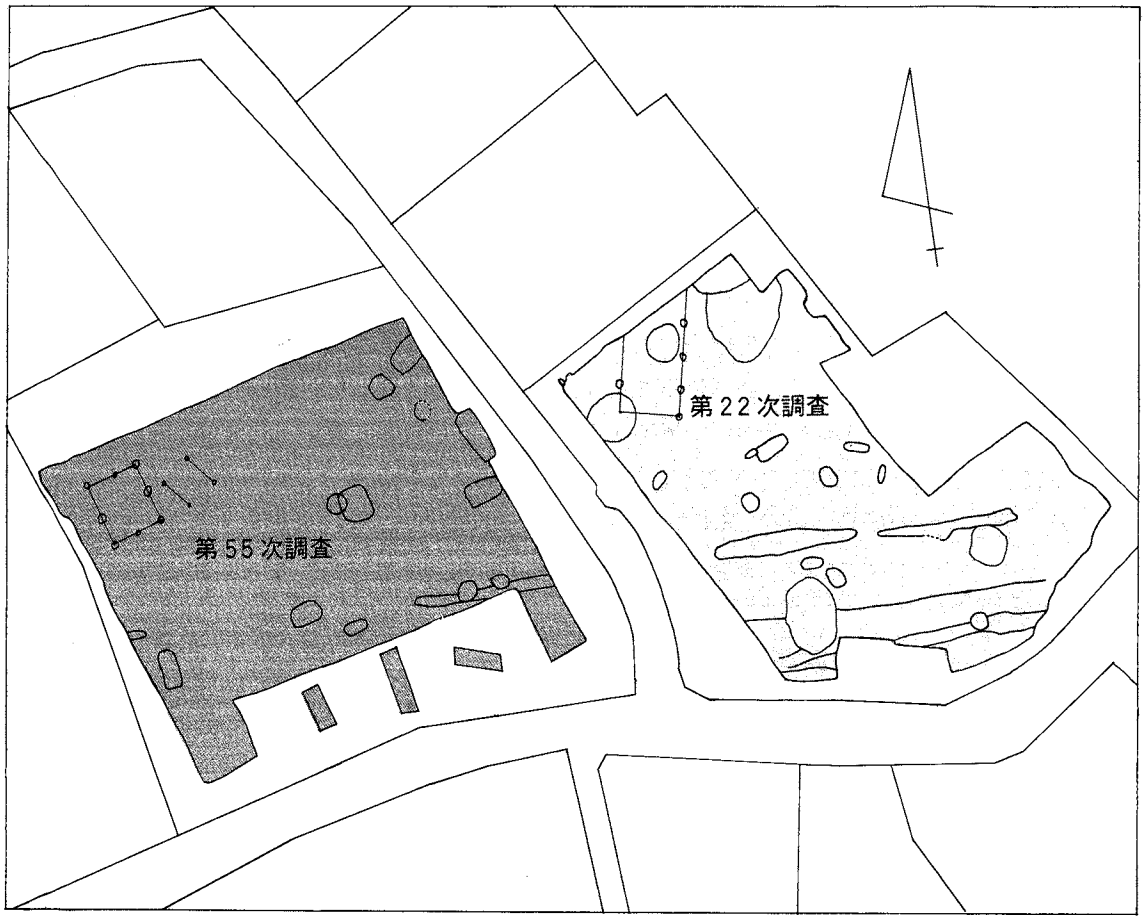


Fig. 1　那珂遺跡群第55次調査地点位置図（1／500）

調査の記録

1）掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ－０１（Fig. 3）

調査区北側で検出された１間×１間の軸をＮ－41°－Ｗにとる建物である。柱穴堀方は円形または楕円形を呈し、底に20～30cmの平石を敷くものである。残存する深さは20～40cmで、柱間隔は2.3～2.4mを測る。確認された規模は１間×１間であるが、この部分は各時代のピットが密に切り合っている地点であり、また南側の遺構面は低くなって遺構密度も減少することから後世の削平が予想され、この建物規模も確認されたもの以上であった可能性が大きい。遺物は土師器の小破片がＳＰ－143、279から出土している。

ＳＢ－０２（Fig. 3）

調査区北側で検出された２間以上×２間の軸をＮ－17°－Ｗにとる建物である。柱穴堀方は長軸30～60cmを測り、周囲のピットより深い。柱間隔は1.7～2.2mを測り、ばらつきがみられる。遺物はＳＰ－018から白磁小片が出土している。

Fig. 2 那珂遺跡群第55次調査遺構配置図（1／100）

2）土坑・土壙（ＳＫ）

ＳＫ－０１（Fig.4、ＰＬ.2）

調査区西側にて検出された。西側をＳＫ－０４を切る。平面は長方形を呈し、長軸1.3m、短軸57cm、深さ45cmを測る。東西両壁は立ち上がりが強く、南北両壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦だが、南側はやや低くなる。プランなどから土壙墓と思われる。白磁片、陶器片などが出土している。中世後期以降のものである。

ＳＫ－０２（Fig.4、ＰＬ.2）

調査区南側にて検出された。平面は隅丸の長方形を呈し、長軸1.6m、短軸80cm、深さ15cmを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物（Fig.8、ＰＬ.4）

１は土師の土錘である。残存長2.3cm、直径約１cmを測る。図化できないが、他に陶器片、擂鉢片が出土している。

ＳＫ－０３（Fig.4、ＰＬ.2）

調査区南側にて検出された。攪乱溝に切られる。平面は不定形を呈し、長軸2.2m、短軸1.5m、深さ15cmを測る。埋土は上面が地山ロームと近似する黄褐色粘質土層、下層は黒褐色粘質土層であった。遺物は須恵器、土師器の小破片が出土している。

ＳＫ－０４（Fig.4）

調査区西側にて検出された。ＳＫ－０１に切られる。平面は楕円形を呈し、深さ30cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面は半円形を呈する。遺物は須恵器、土師器の小破片が出土しており、古墳時代後期に属する。

ＳＫ－０５（Fig.4）

調査区東端にて検出され、遺構は調査区外へのびる。平面は長方形に近いものと考えられ、長軸は2.9mを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は陶器の擂鉢、白磁片が出土している。

ＳＫ－０６（Fig.4、ＰＬ.2）

調査区東側に位置し、北側を現代の井戸に切られる。平面は隅丸の長方形を呈し、西側は幅が広く、一段テラス状になっている。長軸2.2m、短軸1.7m、深さ50cmを測る。底面は中央部がやや低くなる。プランなどから土壙墓と思われる。出土遺物には同安窯系青磁の破片が出土している。

ＳＫ－０７（Fig.5、ＰＬ.3）

調査区中央部にて検出された。ＳＥ－０１を切る。平面は一辺2.3mの隅丸の四角形を呈する。壁面は緩やかで、中央部が最も低い。

出土遺物（Fig.8、ＰＬ.4）

２は白磁の高台付皿で焼成は良くない。釉はオリーブ色を呈し、部分的に白濁している。口径は11.6cm、底径4.2cm、器高3.3cmを測る。３は土鈴である。全長3.9cm、最大径3.2cmを測る。完形品である。

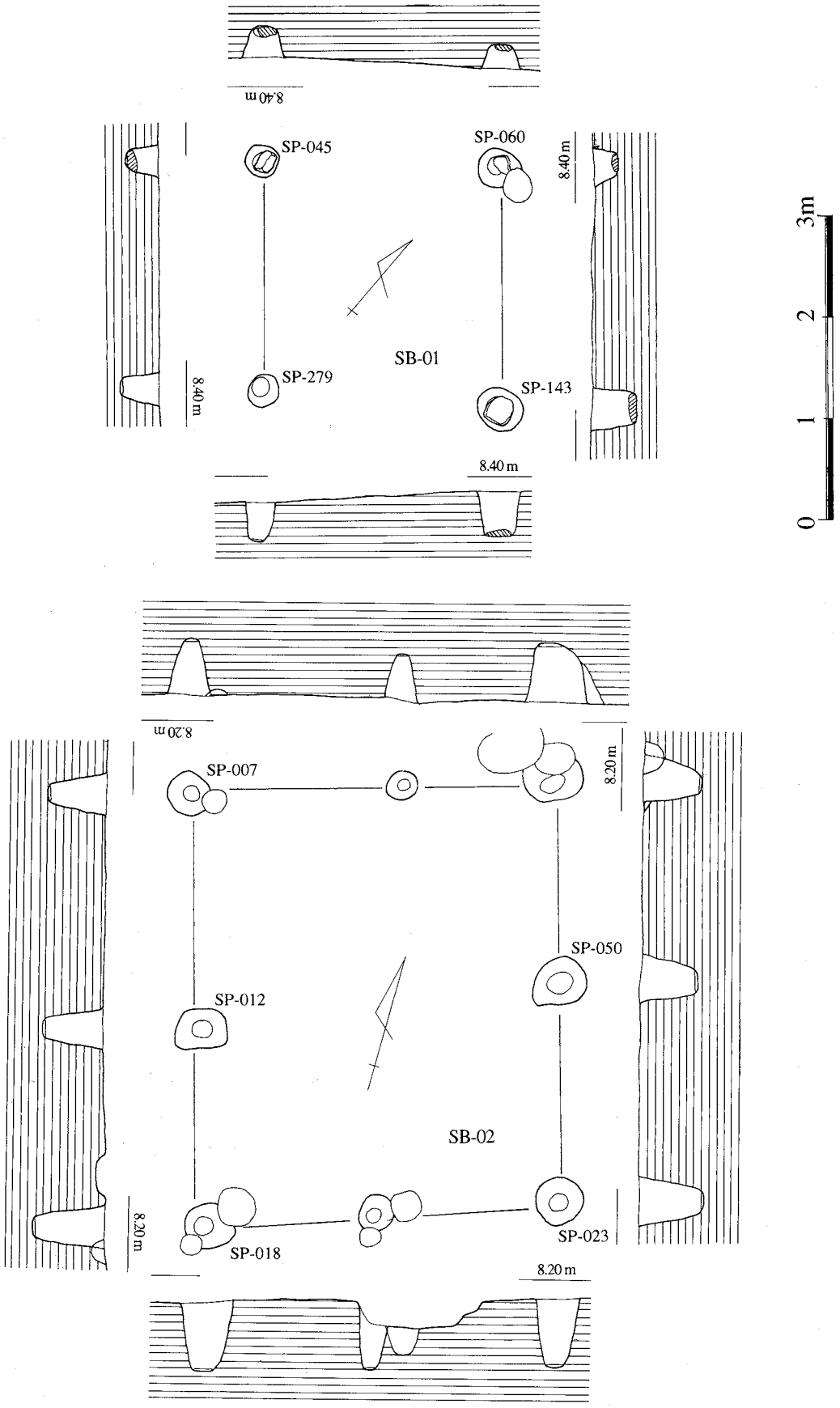


Fig.3　ＳＢ－01、02実測図（1／60）

ＳＫ－０８（Fig.5）

調査区南側に位置し、ＳＤ－０５を切る。平面は直径1.5mの円形を呈し、中央部の深さは約50cmを測る。

出土遺物（Fig.8、ＰＬ.4）

４はミニチュアの土器である。焼成は良好で残存高2.8cmを測り、内外面に指頭圧痕がみられる。他に磨滅が著しいが断面四角形の高台をもつ須恵器杯の破片が出土しており、所属年代は８世紀中頃から後半と考えられる。

ＳＫ－１０（Fig.5）

調査区南側にて検出され、ＳＤ－０５を切る。平面は直径約１mの円形を呈し、深さ25cmを測る。底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ－１２（Fig.5）

調査区の東側にて検出された。攪乱に東側を切られている。平面は楕円形を呈すると思われ、深さは15cmを測る。遺物は須恵器の小破片が１点出土している。

ＳＫ－１３（Fig.5、ＰＬ.3）

調査区北東側にて検出された。平面は長方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ30cmを測る。底面は平坦だが北側に浅い窪みがみられる。遺物は土師器片が出土している。

ＳＫ－１４（Fig.5）

調査区北東端に位置し、遺構は調査区外へのびる。平面は不定形を呈し、短軸1.6m、深さ45cmを測る。南壁側は幅約20cmのテラス状になっている。遺物は須恵器、土師器片が出土している。

ＳＫ－１５（Fig.5）

調査区南側に位置し、ＳＤ－０５に切られる。平面は長方形を呈し、長軸95cm、短軸65cm、深さ45cmを測る。底面は平坦である。遺物は出土していないがＳＤ－０５に切られることから、６世紀後半以前のものである。

3）井戸（ＳＥ）

ＳＥ－０１（Fig.6、ＰＬ.3）

調査区のほぼ中央に位置する。ＳＫ－０７に切られる。平面形は円形を呈し、上面において1.4mを測る。深さは2.8mを測り、八女粘土層まで掘り下げている。底面は円形で約70cmを測る。

出土遺物（Fig.8、ＰＬ.4）

５は土師器の皿である。口径9.0cm、底径7.7cm、器高1.1cmを測る。焼成は良好で、底部には糸切り後、板状の圧痕が残る。６は土師器の坏である。口径14.6cm、底径9.5cm、器高3.0cmを測る。底部は糸切り後、板状の圧痕が残る。７は土師器の高台付椀である。口径は反転復元で15.5cmを測る。焼成は良好で、白灰橙色を呈する。８は瓦器椀である。焼き歪みが著しく、口径約14～16cm、底径6.6cm、器

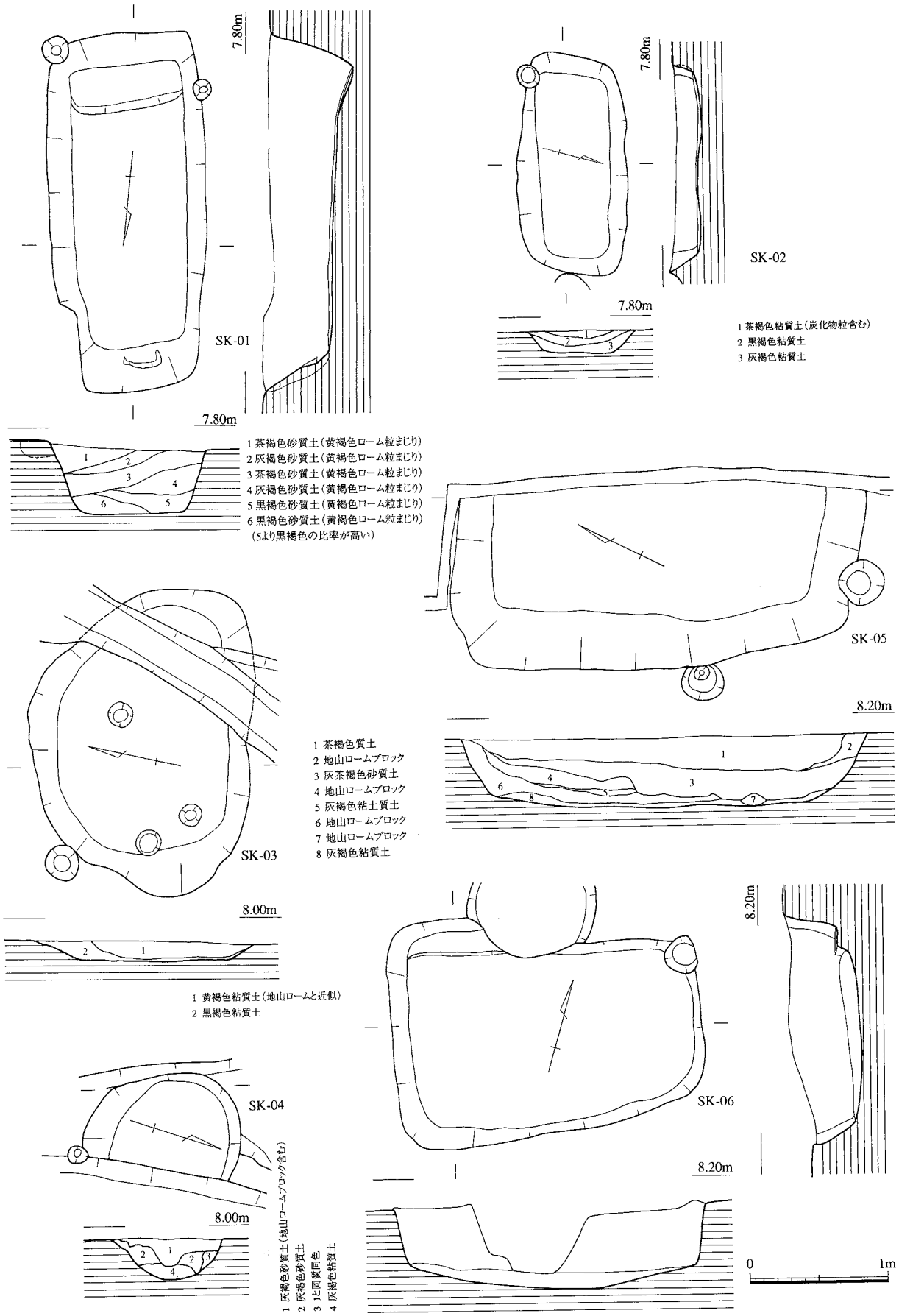


Fig. 4　SK－01、02、03、04、05、06実測図（1／40）

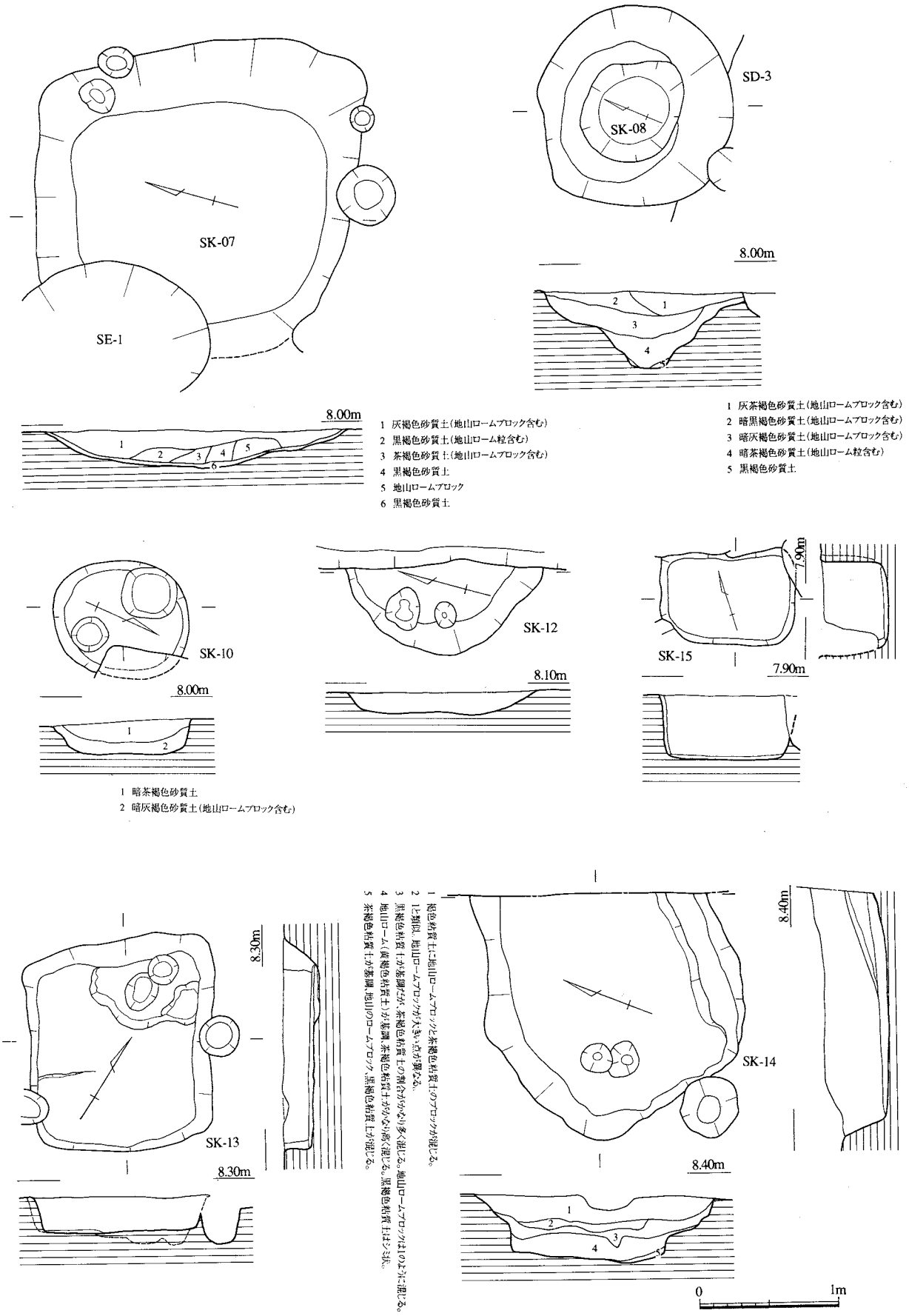


Fig. 5　ＳＫ－07、08、10、12、13、14、15実測図（1／40）

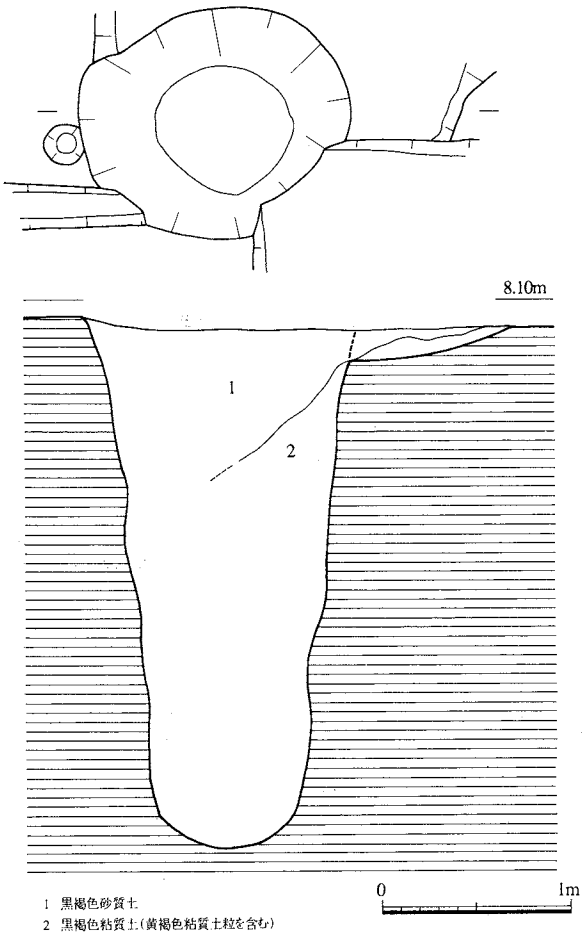


Fig. 6　ＳＥ－01実測図（1／40）

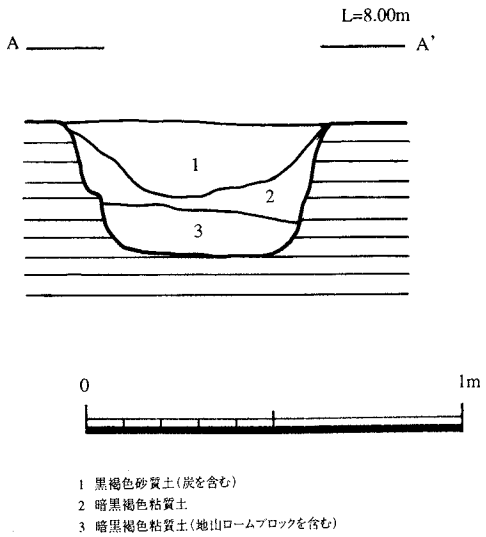


Fig. 7　ＳＤ－05断面実測図（1／20）

高約4.8～5.9cmを測る。焼成は良好で、内外面にヘラ磨きが残るが粗い。所属年代は遺物から12世紀後半に位置づけられる。

4）溝（ＳＤ）

検出作業ごとに溝状のものをＳＤ番号を付し掘削を行ったが、上面からの浸み込み状のものや、浅い窪み状になってしまうものが多かった。

ＳＤ－０５（Fig.7、ＰＬ.3）

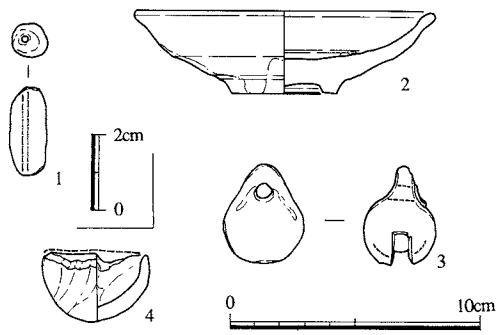
調査区南東部に位置する。幅約80cmを測り、第22次調査のＳＤ０１、ＳＤ３２と同一遺構と思われるものである。断面は3層に分けられ上層は炭化物を少量含む黒褐色砂質土、中層は暗黒褐色粘質土、下層は地山ロームブロックを含む暗黒褐色粘質土であった。

出土遺物（Fig.8、ＰＬ.4）

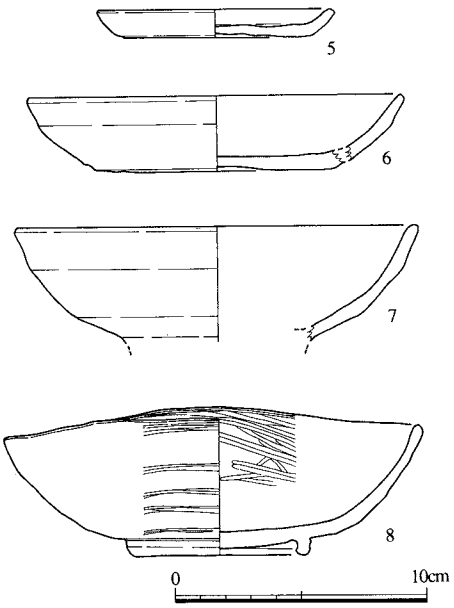
9は土師器の高坏の坏部である。口径11.6cmを測る。年代的にも第22次調査の溝と矛盾しない。

溝出土の遺物（Fig.8、ＰＬ.4）

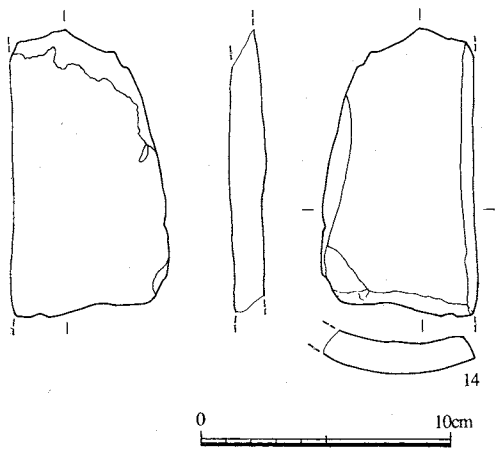
10はＳＤ－０２とＳＤ－０３の接合部から出土した土鈴である。全長7.0cmを測り、最大径5.5cmを測る。なお、ＳＤ－０２，０３から近世染付が出土している。



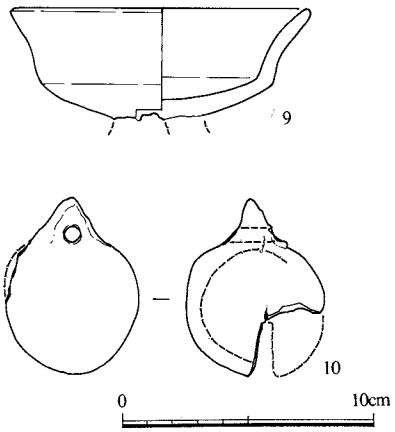
土坑·土壙(SK)出土遺物



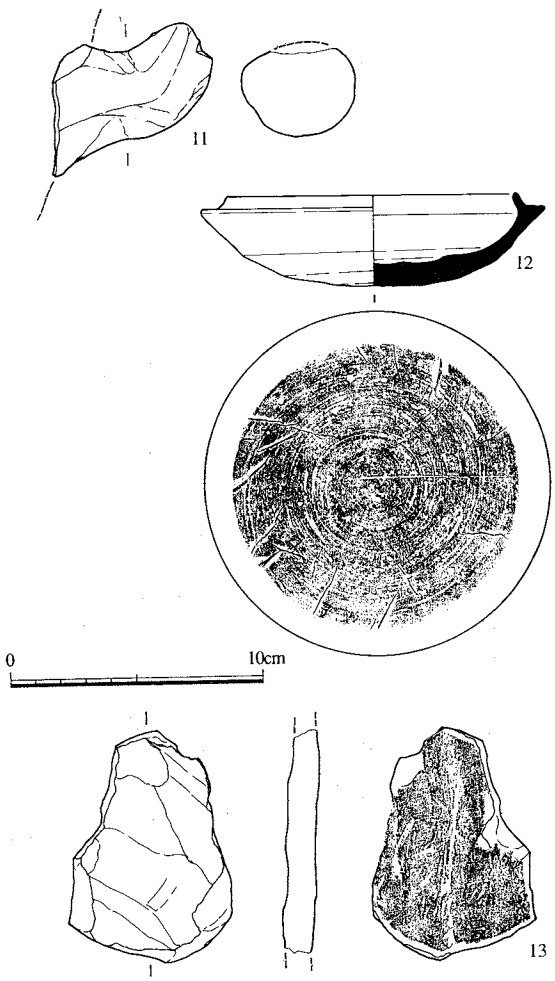
井戸(SE)-01 出土遺物



包含層出土物



溝(SD)出土遺物



柱穴(SP)出土遺物

Fig. 8　出土遺物実測図（1／3）

5）柱穴（ＳＰ）

調査において掘削したピット状遺構は600穴以上を数え、うち約400穴から遺物が出土した。小破片が大半を占めるが、古墳時代、古代、中世、近世の遺物がみられた。ただし、弥生時代の遺構と確定できるものは確認されていない。

出土遺物（Fig.８、ＰＬ.４）

11・12はＳＰ－245から出土した。11は甑の把手である。焼成は良好で白橙色を呈する。12は須恵器の坏身である。口径11.4cm、器高3.6cmを測り、底部外面にヘラ記号を有する。13はＳＰ－249から出土した平瓦片である。灰白色を呈し、凹面には細かい布目が残る。

6）遺物包含層

調査区南側の一部に黒褐色の遺物包含層がみられた。調査区の遺構面は前述したように南側へ緩やかに低くなっており、そのため後世の削平をあまり受けていないと思われる。

出土遺物（Fig.８、ＰＬ.４）

14は平瓦の破片である。厚さは最大約1.5cmを測り、灰白色を呈し、器面は磨滅している。

まとめ

弥生時代の遺構が多くみられる那珂台地は、古墳時代から古代においても注目されている。今回の調査地点において掘立柱建物、土坑（壙）、井戸、溝など古墳時代以降の遺構が調査された。古墳時代の溝は東側に位置する第22次調査においても確認されており、台地の南側を画するような性格をもっていたと考えられる。北側に広がるピット群は古墳時代から古代、中世、近世と長期間人々の居住空間として利用されてきたことをあらわしている。台地の縁辺部にあたるこの地点が各時代どのような位置にあったのか今後に課題を残す調査となった。

Ｐｈ.１　作業風景

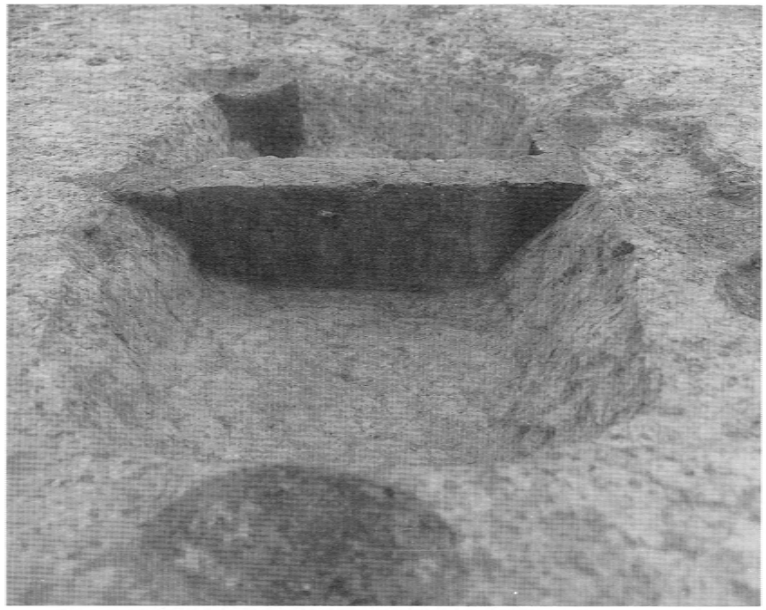
PL. 1

1.第５５次調査西側調査区全景（東から）

2..第５５次調査東側調査区全景（西から）

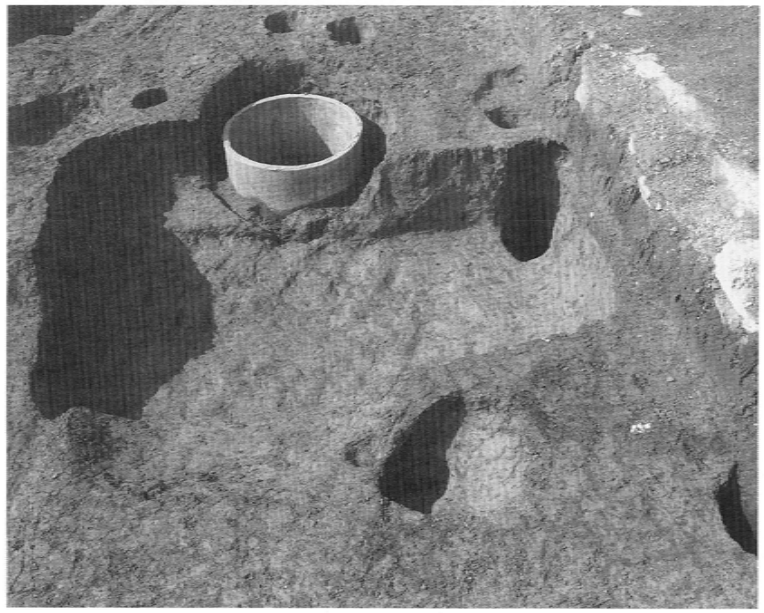
PL. 2

1.
ＳＫ-０１
完掘状況
（北から）



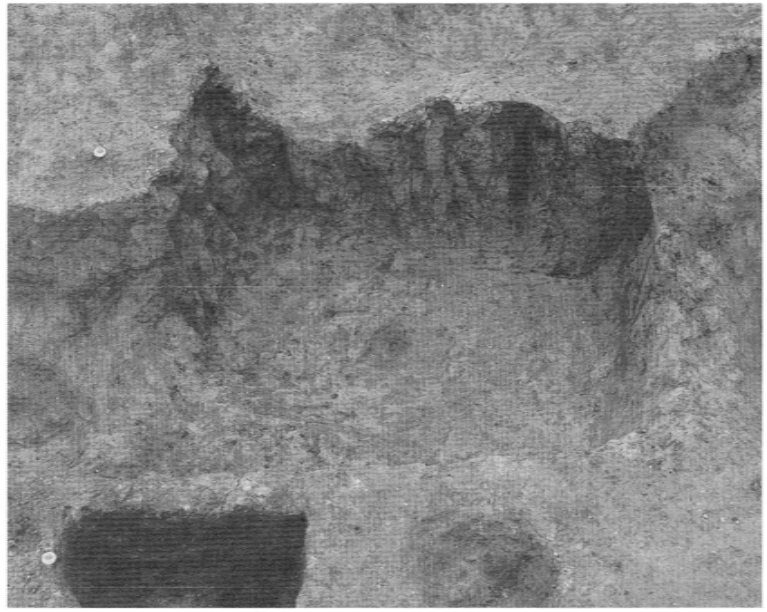
2.
ＳＫ-０２
検出状況
（東から）

3.
ＳＫ-０３
検出状況
（西から）

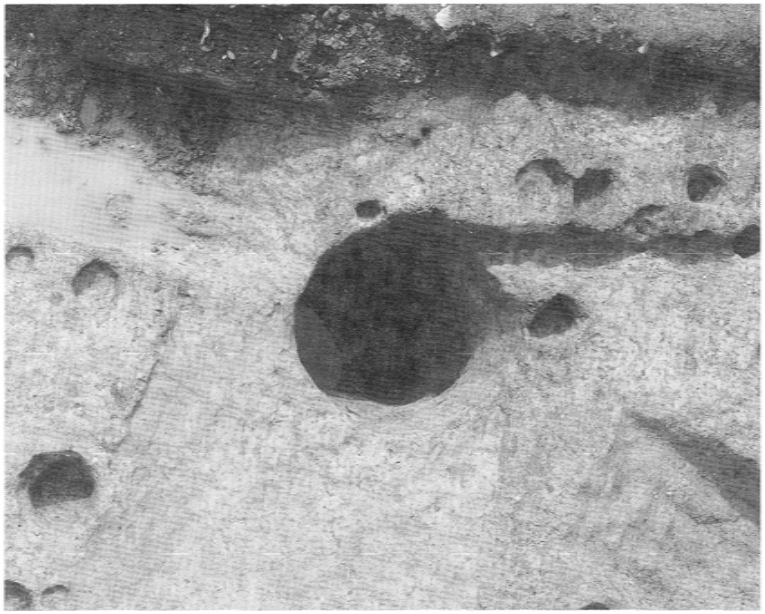


4.
ＳＫ-０６
完掘状況
（南から）

1.
SK-07
検出状況
(西から)



2.
SK-13
完掘状況
(南から)

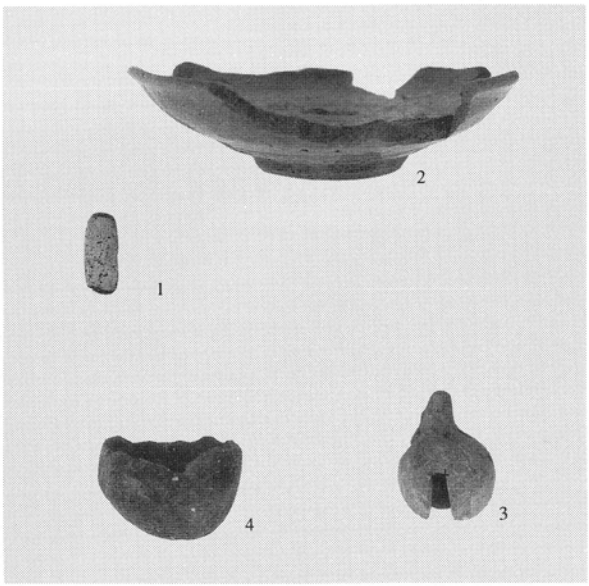


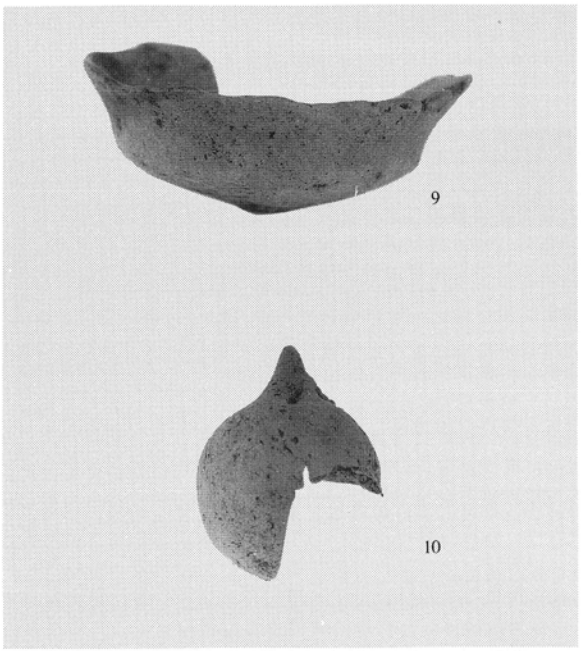
3.
SE-01
完掘状況
(東から)

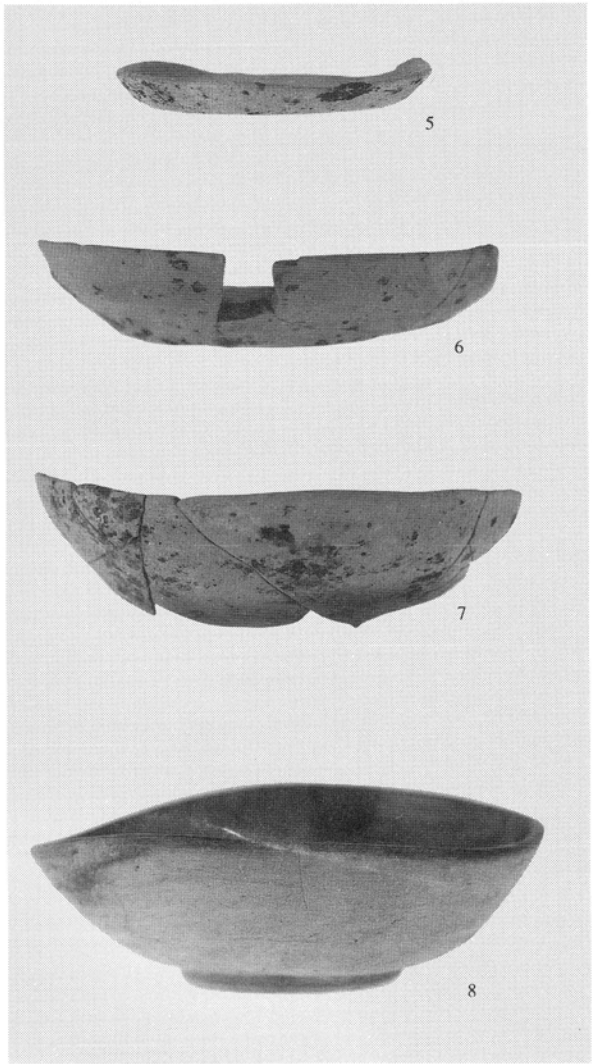
4.
SD-05
完掘状況
(西から)

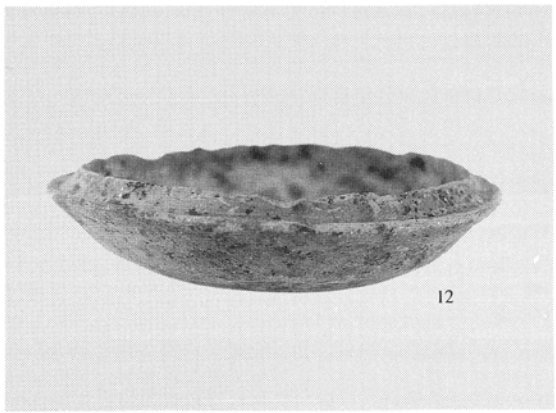
PL. 3

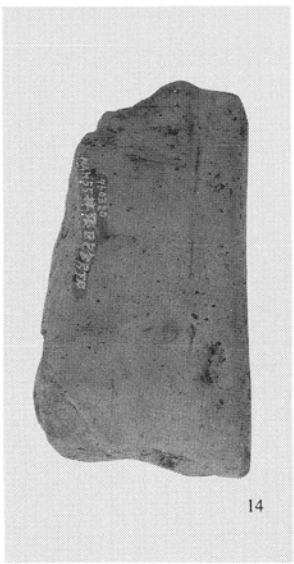
PL. 4

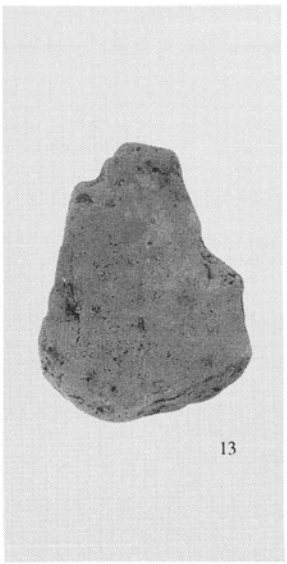








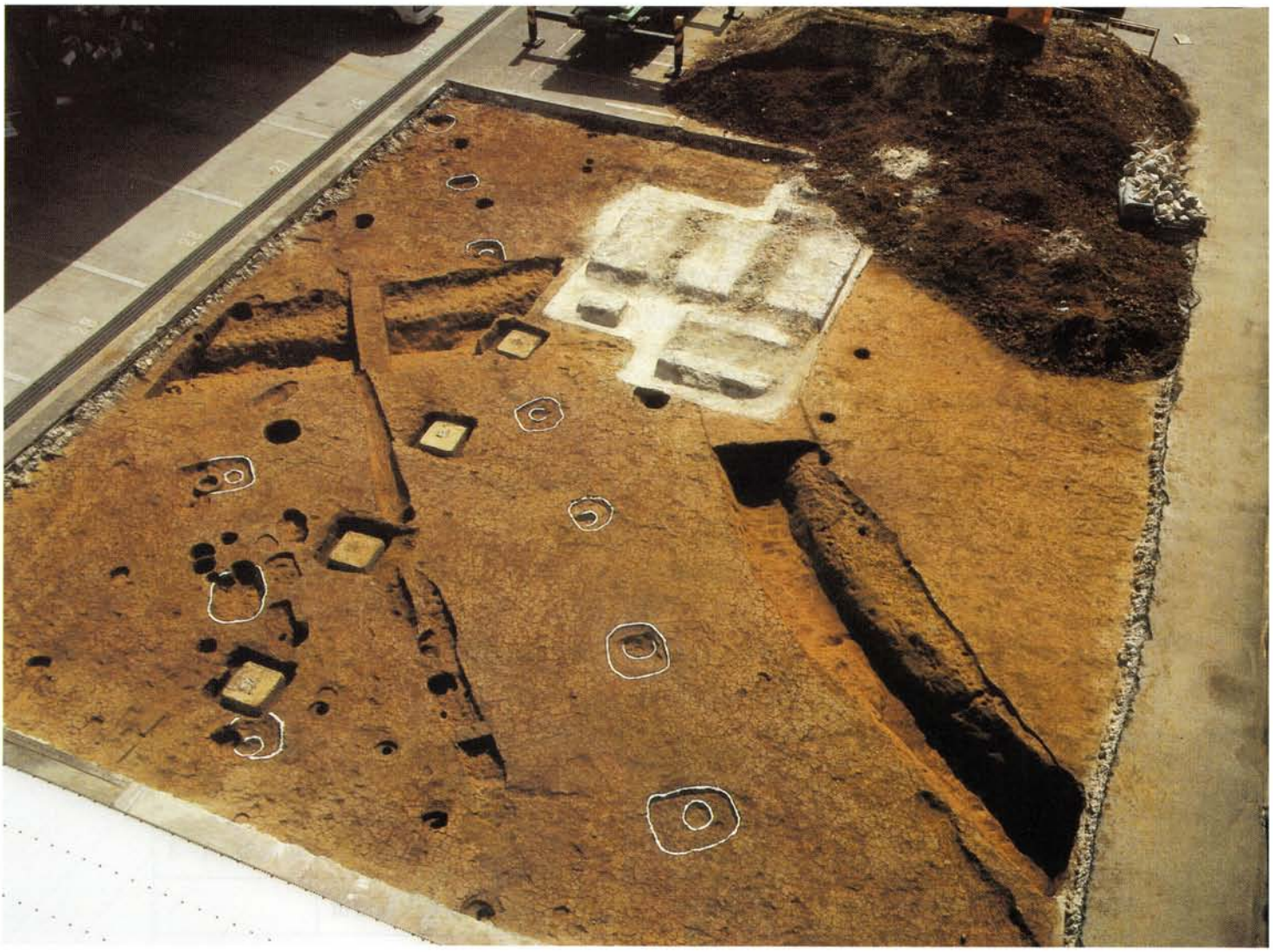




出土遺物

那珂遺跡群

－第５６次調査－



遺跡調査番号　９５５６
遺 跡 略 号　ＮＡＫ５６

例　言

1．　本章は、造成・倉庫建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、那珂遺跡群第56次調査（福岡市博多区五十川１丁目13－1）の概要報告書である。

2．　本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。

3．　本章に使用した遺構実測図・遺物実測図は大庭康時が作成した。また、製図には、大庭康時があたった。

4．　本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。

5．　本章で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。

6．　本調査にかかわる遺構写真は、大庭康時が撮影した。

7．　本書にかかわる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・森寿恵・山田美樹があたった。

8．　本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9556		遺跡略号	NAK－56	
調査地地番	博多区五十川1丁目13－1			分布地図番号	塩原38, A－3
開発面積	11209.12㎡	調査面積	296.56㎡	調査実施面積	
調査期間	1996年3月1日～3月18日				

第２章　第56次調査の記録

Ⅰ　はじめに

１．発掘調査にいたる経緯

1995年2月7日、株式会社山口油屋福太郎（以下、株式会社福太郎と略す）から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市南区五十川１丁目１３－１に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、縄文時代晩期以降の複合遺跡である那珂遺跡群の西側で、縄文時代晩期の二重環濠が発見された第37次調査地点の南側にあたり、遺跡の存在が予想される地点であった。

事前審査願を受理した埋蔵文化財課は、3月8日に試掘調査を実施、遺構の存在を確認した。一方、株式会社福太郎から提出された開発計画は工場増築であり、遺構面は大きく削平を受けて遺存状況は必ずしも良くなかったが、現地表面から遺構検出面までが30センチ前後と浅く、工事による遺跡の破壊は必至と考えられた。この結果を受けて、埋蔵文化財課では、発掘調査による記録保存が不可欠であると判断し、株式会社福太郎との交渉に入った。

申請地は、半分程度が駐車場、残りが稼動中の冷蔵庫を設置した大型の倉庫になっており、倉庫部分については、基礎による撹乱・破壊が予想されることから、ひとまず駐車場部分について発掘調査を行い、その成果を見て、倉庫部分の発掘調査の可否を判断するという前提でまとまり、1996年3月に発掘調査を実施することで合意を見た。それを受けて、同年の２月いっぱいまで博多区井相田において井相田Ｃ遺跡群第６次調査を担当していた大庭康時を発掘調査担当として、３月１日より、発掘調査に着手することとなった。

２．発掘調査の組織と構成

調査委託	株式会社山口油屋福太郎		代表取締役	山口　毅		
調査主体	福岡市教育委員会		教育長	尾花　剛（前任）		
				町田英俊（現任）		
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長	荒巻輝勝		
	同		第二係長	山口譲治		
調査庶務	同		第一係	西田結香		
調査担当	同		第二係	大庭康時		
調査作業	佐藤信（福岡大学）		井口正愛	大久保五枝	大久保学	太田みゆき
	杉山正孝	都野浩之	永隈和代	中込陽子	長田嘉造	早川浩
	松山真紀子	村崎祐子	吉田市芳	吉田清		

このほか、発掘作業に関わる諸条件の整備・調査中の便宜については、株式会社福太郎および有限会社祐建築設計事務所（代表取締役　山本茂樹氏）、松尾建設株式会社（作業所長　山崎保氏）よりご協力をいただいた。記して、謝する次第である。

Ⅱ　発掘調査の記録

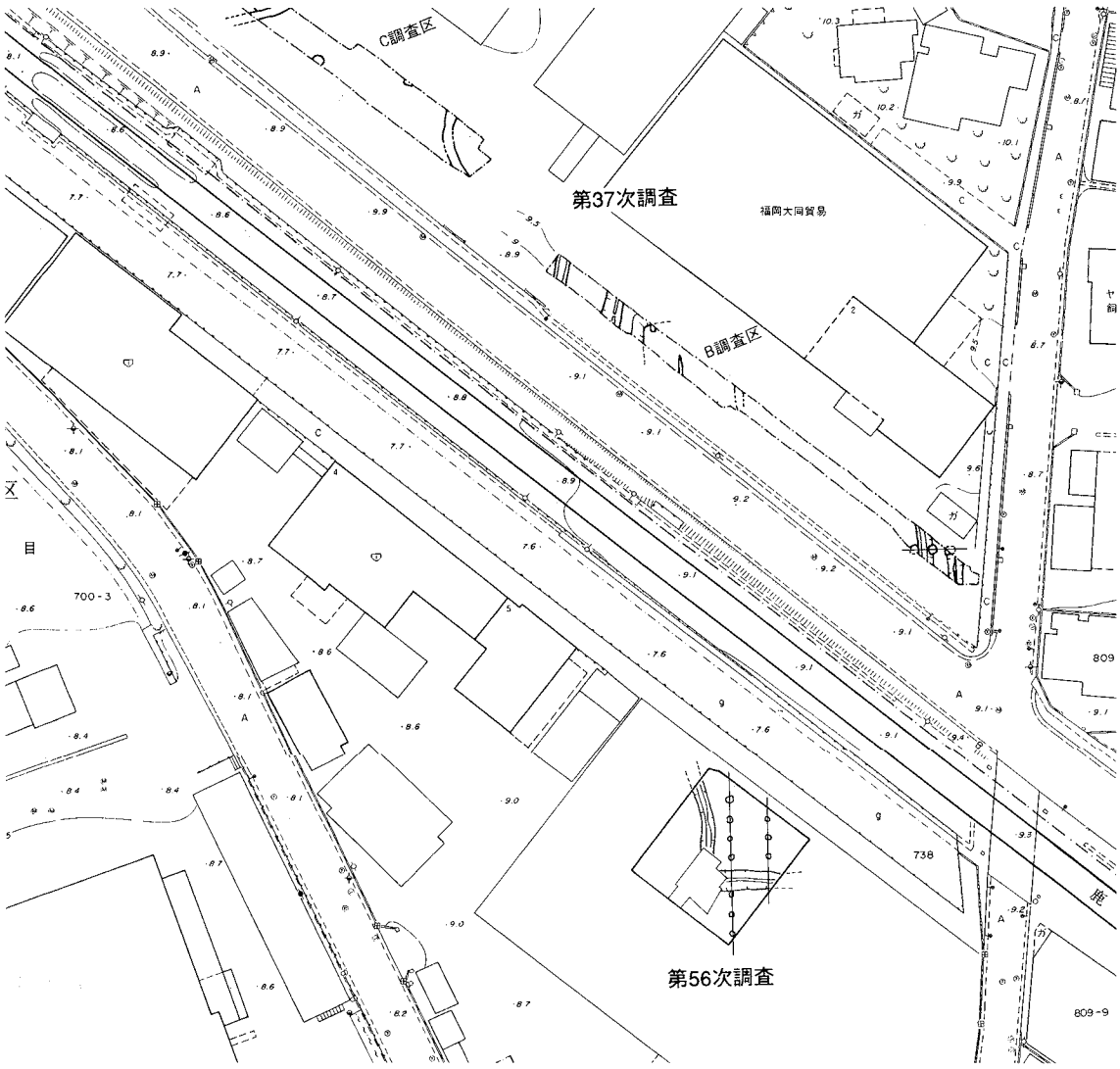
１．発掘調査の方法と経過

前述したように、遺構検出面が現地表から浅く、さらにすでにかなりの削平を受けていると考えられることから、既存の倉庫部分はとりあえず除外し、駐車場部分について発掘調査を開始した。

調査地点は、アスファルト舗装がなされており、事前に松尾建設により舗装の表面を掘削・搬出してもらった。ただし、遺構検出面が舗装下のバラスの直下に接しているため、削りすぎるのを懸念し、バラス以下は文化財側で掘削することとした。

３月１日、バックホーを入れて、バラス層の除去を行い、調査に着手した。土曜・日曜日をはさんで、４日より遺構検出と遺構精査にとりかかった。

検出した遺構は、溝・柱穴であるが、それぞれに溝１～７、Ｐ.１～５１と通し番号をつけて、遺物



Ｆig.9　調査地点位置図（1／1,000）

の取り上げ、実測を行った。

実測図は、調査区全体に２メートル方眼をかけ、２０分の１で作図、溝の断面については１０分の１で実測している。調査区にかかる土層図は、バラス直下が検出面であるため、割愛した。

遺構写真は、３５ミリの小型と６×７の中判を用い、モノクロとカラースライドで撮影した。

駐車場部分の発掘調査は、３月１１日にはほぼ掘り上がった。削平が激しいためか、遺構密度は薄く、特に溝１の西側では、ほとんど遺構が見あたらなかった。また、溝１・２を除けば、遺存部分は浅かった。これらの点からみて、本調査区の西に接し、しかも既存の建物によって地下げが行われて

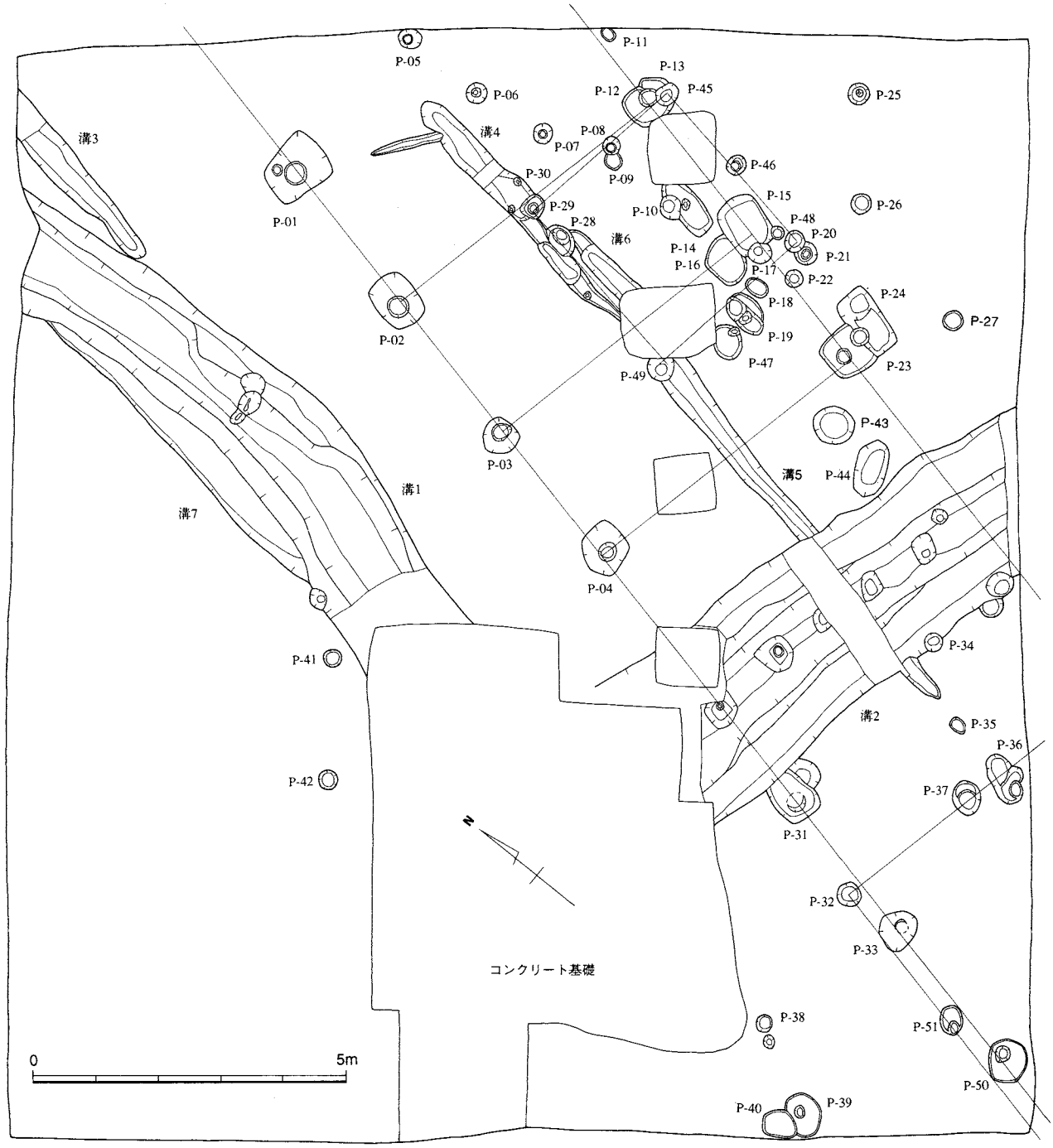


Fig.10　遺構全体図（1／100）

いる倉庫部分については、遺構の残存はほとんど期待できないという結論に達した。したがって、調査区の拡大は断念、掘り残し部分や、溝のベルト部分の掘り上げを行い、３月１８日をもって器材撤収、発掘調査を終了した。

２．調査の概要

前述した通り、過去の大規模な削平により、旧地形の表土部分は失われ、舗装に関わるバラス層の直下で鳥栖ローム層の下部が露出し、その面で遺構を検出した。したがって、かなりの遺構が失われたと推測され、遺構密度は薄く、遺存した遺構も浅い。検出した遺構は、溝状遺構7条、柱穴５１基である。柱穴には、浅いながらも柱痕跡をとどめるものがあり、３棟の掘立柱建物跡が復元できた。

出土遺物は、弥生時代土器・石器、古墳時代土師器・須恵器、古代土師器・須恵器、中世土師器・陶磁器などが、コンテナ（TS－２８）５箱出土した。弥生時代・古墳時代に属する遺構は、本調査の範囲内では検出されておらず、周辺からの流入遺物と考えられる。

３．遺構と遺物

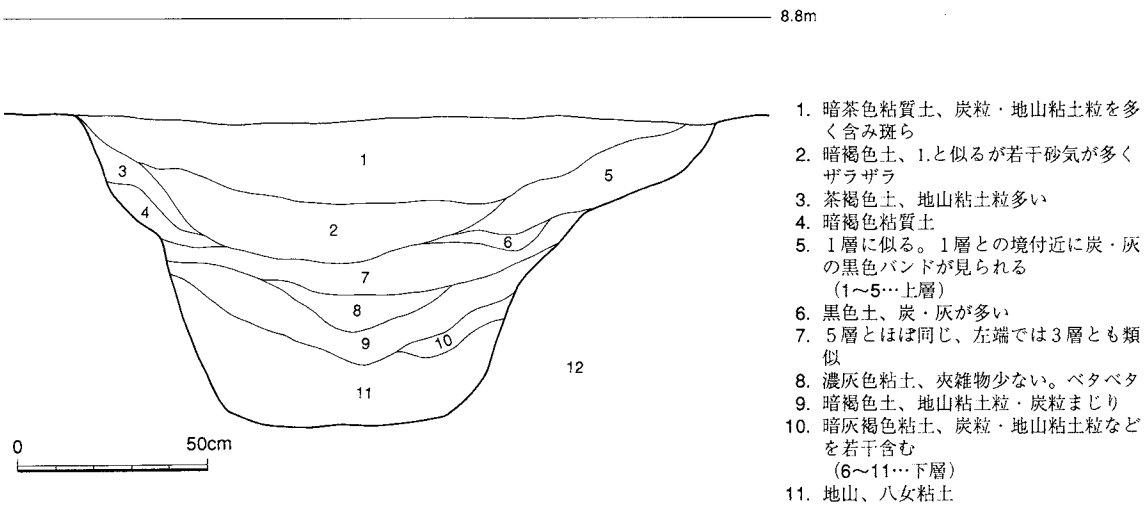
次に、各遺構ごとにその詳細と出土遺物について述べる。

（１）溝状遺構

溝状遺構は、７条検出されている。溝１と溝２は、中世の堀状の遺構である。屈折部分が、コンクリート基礎で撹乱されているが、ともに基礎の反対側には抜けず、一連の溝として折れ曲がるものと思われる。溝３から溝７は、いずれも浅い小溝ですべて方向を一にする。また顕著な遺物の出土はないものの土師器・須恵器などおおむね古代に比定しうる土器片が出土している。後述する掘立柱建物跡とも方向を合わせており、何らかの関連が想定される。

溝１

北から南に、緩く弧を描いて検出された堀状の溝である。検出面上で幅約１７０センチ、深さ８１～９８センチをはかり、底面は南から北に下降する。断面は逆台形を呈するが、二段掘り状となり、掘り直されたものと思われる。埋土は、基本的には暗褐色の粘質土で、水が流れた痕跡はない。



1. 暗茶色粘質土、炭粒・地山粘土粒を多く含み斑ら
2. 暗褐色土、1.と似るが若干砂気が多くザラザラ
3. 茶褐色土、地山粘土粒多い
4. 暗褐色粘質土
5. １層に似る。１層との境付近に炭・灰の黒色バンドが見られる（1～5…上層）
6. 黒色土、炭・灰が多い
7. ５層とほぼ同じ、左端では３層とも類似
8. 濃灰色粘土、夾雑物少ない。ベタベタ
9. 暗褐色土、地山粘土粒・炭粒まじり
10. 暗灰褐色粘土、炭粒・地山粘土粒などを若干含む（6～11…下層）
11. 地山、八女粘土

Fig.11　溝１土層実測図（1／40）

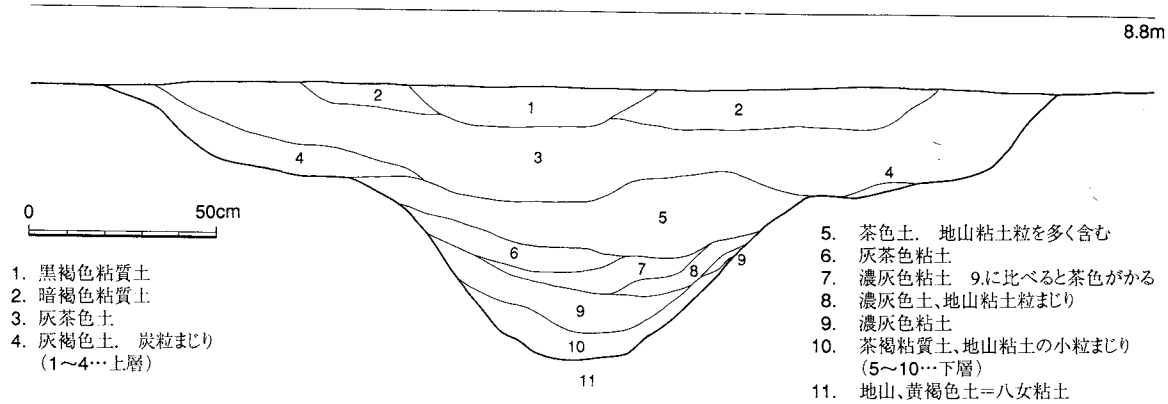


Fig.12 溝２土層実測図(1／40)

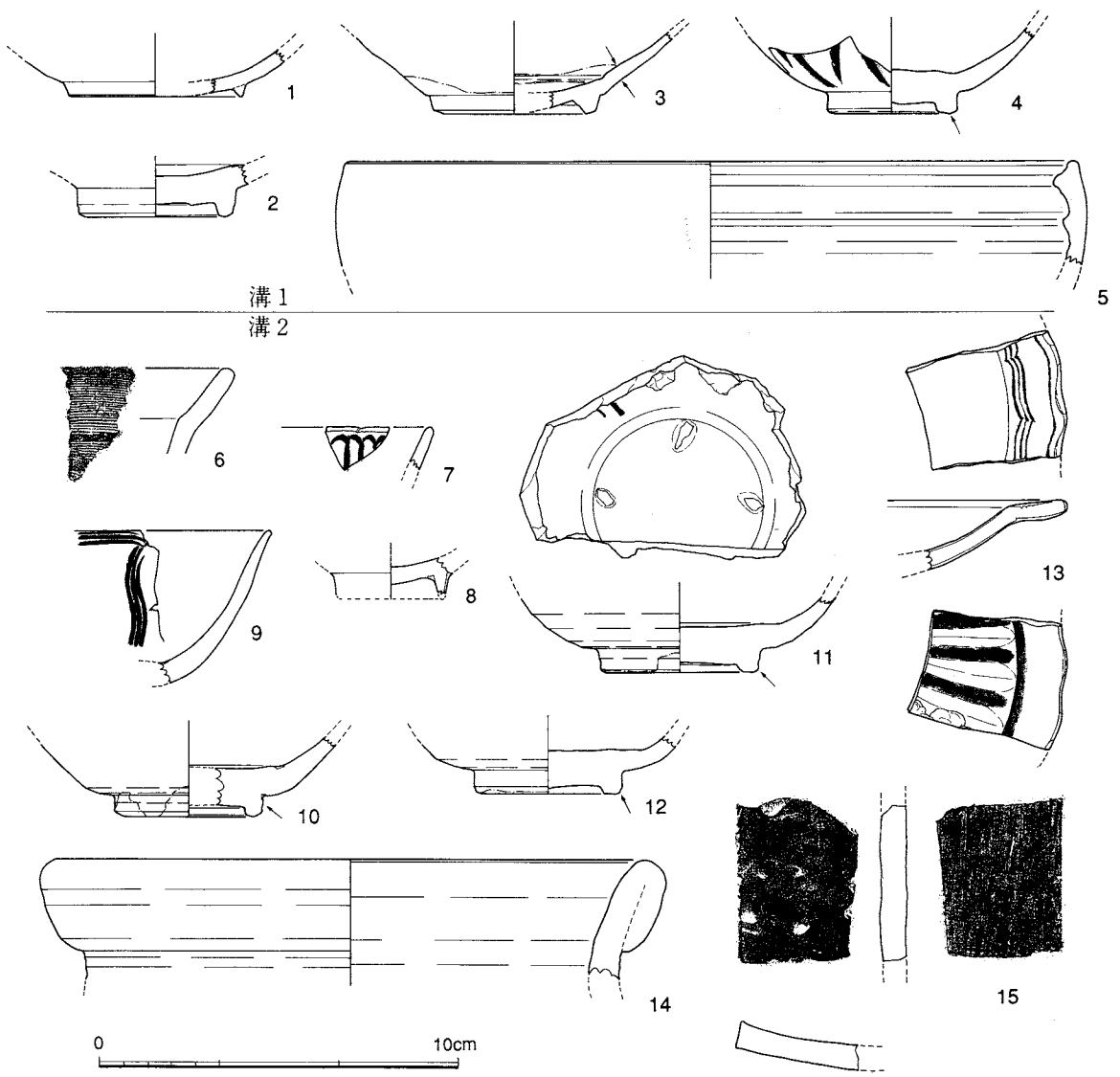


Fig.13 溝状遺構出土遺物実測図(1／３)

Fig.13－１～５に、出土遺物の一部を示す。１は、**瓦器**埦である。内外面とも、単位のはっきりしない幅広の篦磨きを施す。２・３は、**白磁**の碗である。２は、内面施釉、外面露胎で、見込みに圏線がめぐる。３は、見込みを丸く露胎とするもので、そこに断続的な円形の目痕が残る。外面の体部下位から以下は、露胎とする。４は、**青磁**の碗である。高台の畳付から内側を、露胎とする。体部外面には、片切り彫りの沈線で、蓮弁を描く。５は、**無釉陶器**のこね鉢である。赤褐色で粗い胎土の、焼き締め陶器である。

２・４・５が、下層からの出土である。下層は、１３世紀前半頃に位置づけられよう。上層については、時期を判断し得る資料にかける。

溝２

調査区を、東から西に通る溝である。検出面上で幅約２４０～２７０センチ、深さ５９～６８センチで、東から西に下降する。堆積土は、基本的に暗褐色の粘質土で、水が流れた痕跡はない。

溝の断面は、二段掘りの浅いＶ字状を呈する。溝１同様に、掘り直しがあるものと考えられる。また、溝の底には、柱穴状のくぼみが、ほぼ一定間隔で並んでいる。柱痕をとどめているものもあり、何らかの柱を立てたものと推測されるが、性格は不明である。あるいは、逆茂木のような防御施設をもうけたものか。ただし、溝が埋積する時点では抜けていたらしく、土層断面に柱が立っていた痕跡は認められない。

Fig.13－６～１５に、出土遺物の一部を示す。６は、**土鍋**である。土師質に焼成されたもので、外面には煤が付着している。内面は、横方向の刷毛目調整である。７～１３は、**青磁**である。７は碗の口縁部の小片で、外面に細い蓮弁文を刻む。口縁端部には、小さな刻みをいれて輪花とする。８は、碗の底部片である。畳付きを欠くが、全面施釉の後畳付きの釉を掻き取るタイプである。９～１１は、同タイプの碗の破片である。１１の見込みには、重ね焼きの目痕が残る。１３は、盤である。「く」字形に折り返した口縁の端部は、緩く波打って、輪花となる。口縁部の上面には、細い沈線文をあしらう。体部の外面は、幅の細い鎬蓮弁文を刻む。１４は、**備前焼**の壷である。口縁部は、幅広に折り返して、玉縁とする。よく焼きしまって、茶色を呈している。１５は、**平瓦**の破片である。上面は指押さえした後ナデ調整、下面は縦方向に強いナデ調整を施す。小口は、篦切りである。須恵質焼成で、灰色を呈する。

６・７・１１・１２・１４は上層、１３・１５は下層から出土した。これらの遺物からみて、上層には１５世紀、下層には１４世紀の年代が与えられよう。

（２）掘立柱建物跡

検出した５１基の柱穴から、３棟の掘立柱建物跡を抽出した。これら３棟の掘立柱建物跡は、柱筋をほぼ真北に揃えている。このほか、柱穴の遺存状況などを考慮すれば、さらに数棟が存在したことは間違いないが、復元することはできなかった。

１号掘立柱建物跡

調査区を南北に縦断して検出された、掘立柱建物跡である。西側の柱筋については７間分を検出したが、さらに南北に延びる可能性がある。柱間は、２６０センチ前後をはかる。東側の柱筋は、西側のそれから約５メートルの間隔をおいて平行する。東西の柱筋の間隔が離れすぎる感はあるが、柱穴の配置も正確に対応しており、単一の建物として復元した。

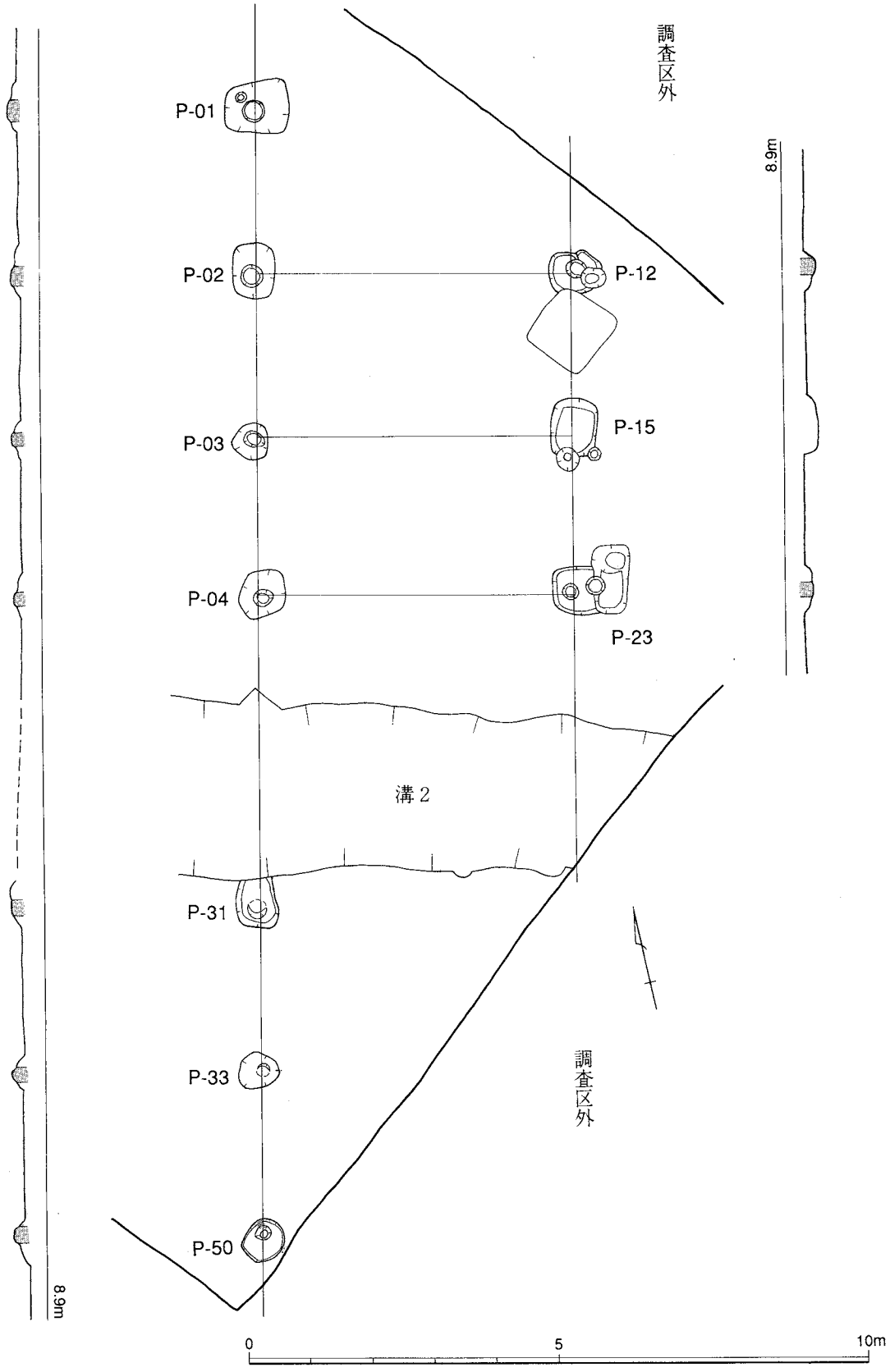


Fig.14　1号掘立柱建物跡(1／100)

柱穴の遺存状態は悪く、底近くの数センチ程が残っていたにすぎない。比較的よく残っている柱穴でみると、掘り方はほぼ方形を呈するようで、少なくとも一辺８０センチを超えるものと思われる。

掘り方内には、円形の柱圧痕が認められた。やはり遺存状態の良いものでみると、柱径３５センチ程度をはかる。

柱穴出土遺物の一部を、Fig.17－３・７に示す。小片が多く、図示できないものが多い。３は、**土師器**の甕である。体部内面はケズリ調整だが、全体に磨滅しており、調整痕は認めがたい。P－１５出土。７は、**須恵器**の坏である。内外面とも横ナデ調整で、外面の底部付近は回転へら削りしている。P－３１から出土した。

これらの遺物からみて、７世紀初めの建物と考えられる。

２号掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡と重複して検出された、２間×２間の側柱建物である。北東角の柱穴P－１３が、１号掘立柱建物跡のP－１２を切る。西の柱筋は、中央の柱を欠く。また、北の柱筋の中央の柱は、やや東に片寄って掘られている。P－０８・P－３０・P－４６で、柱圧痕がみられた。柱径は、１６

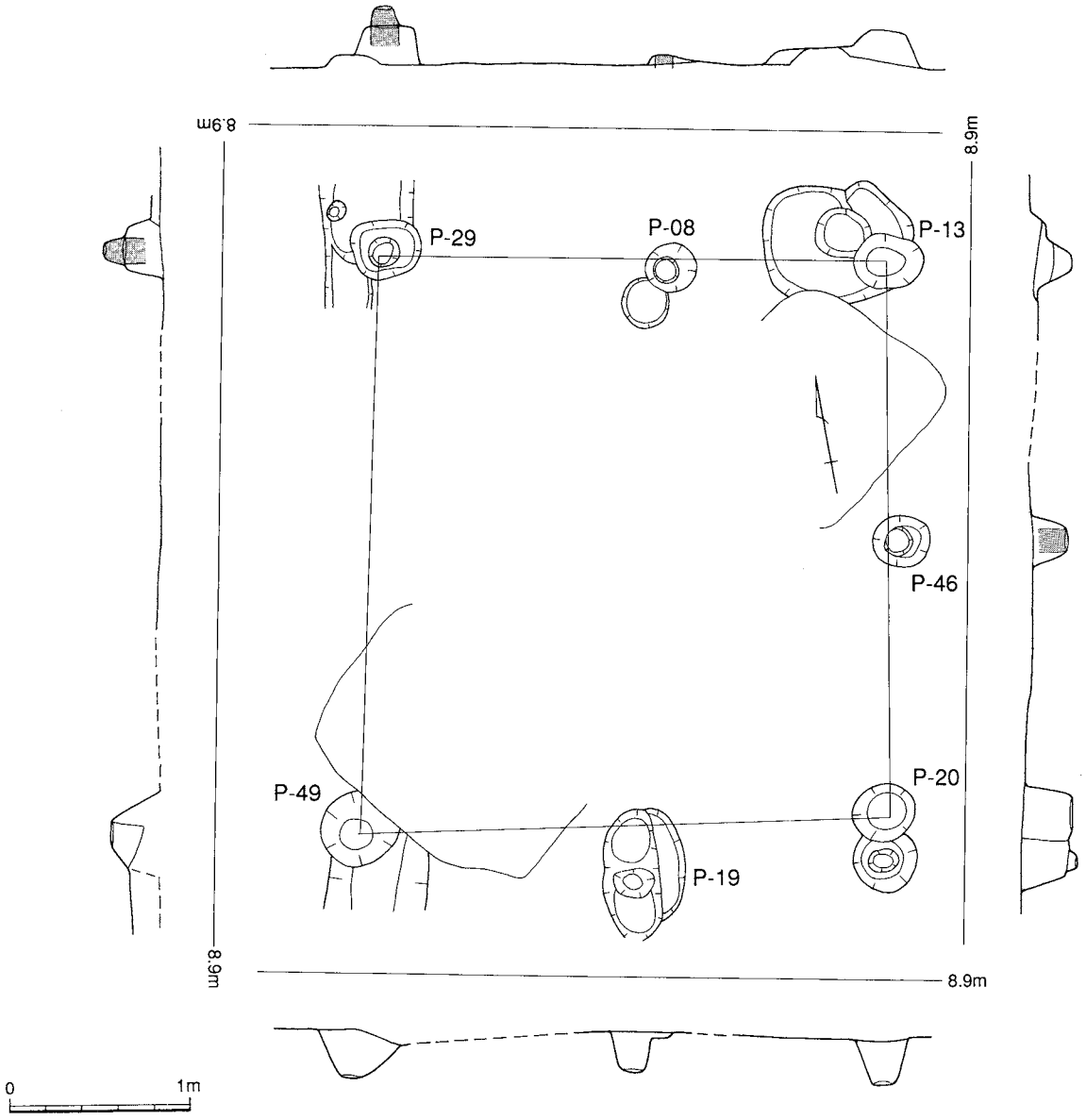


Fig.15　２号掘立柱建物跡実測図(1／40)

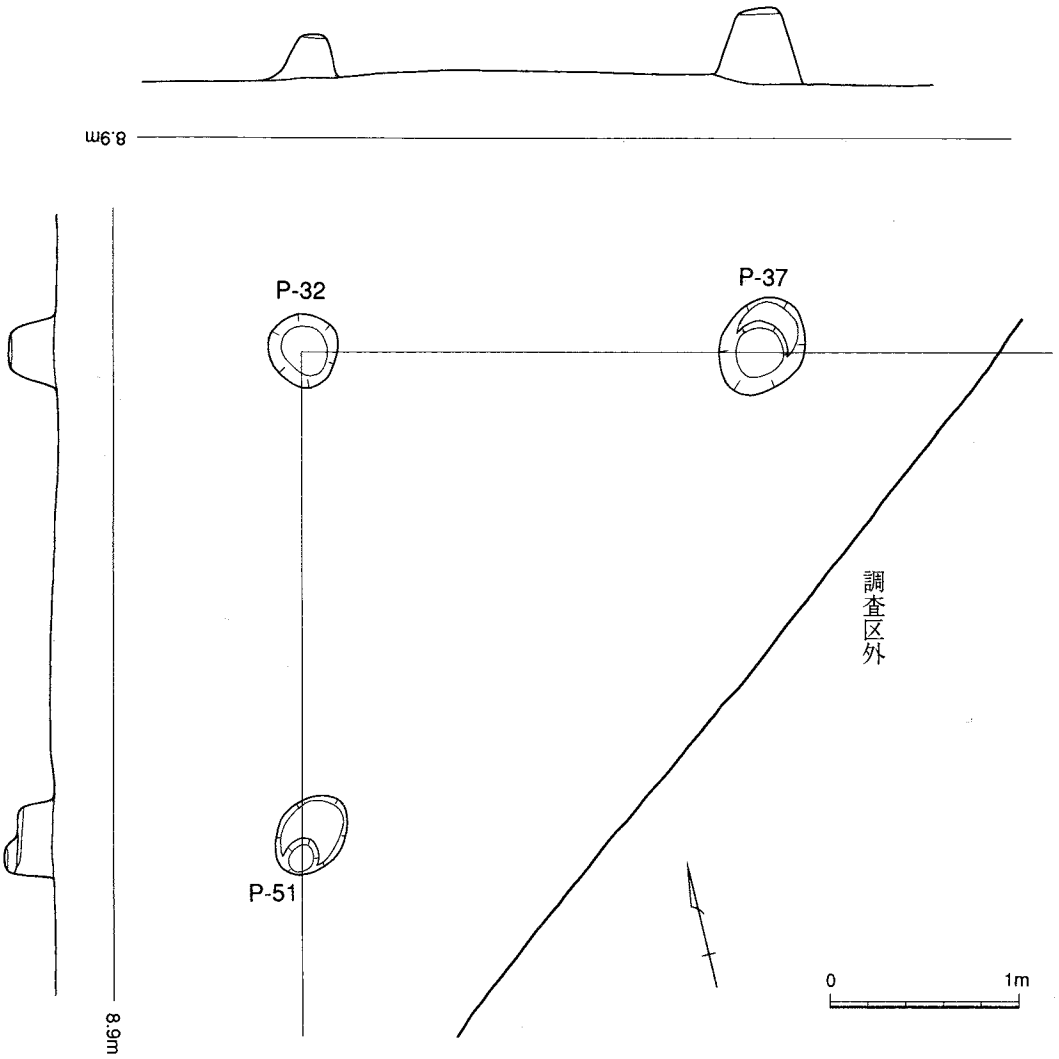


Fig.16　3号掘立柱建物跡実測図(1／40)

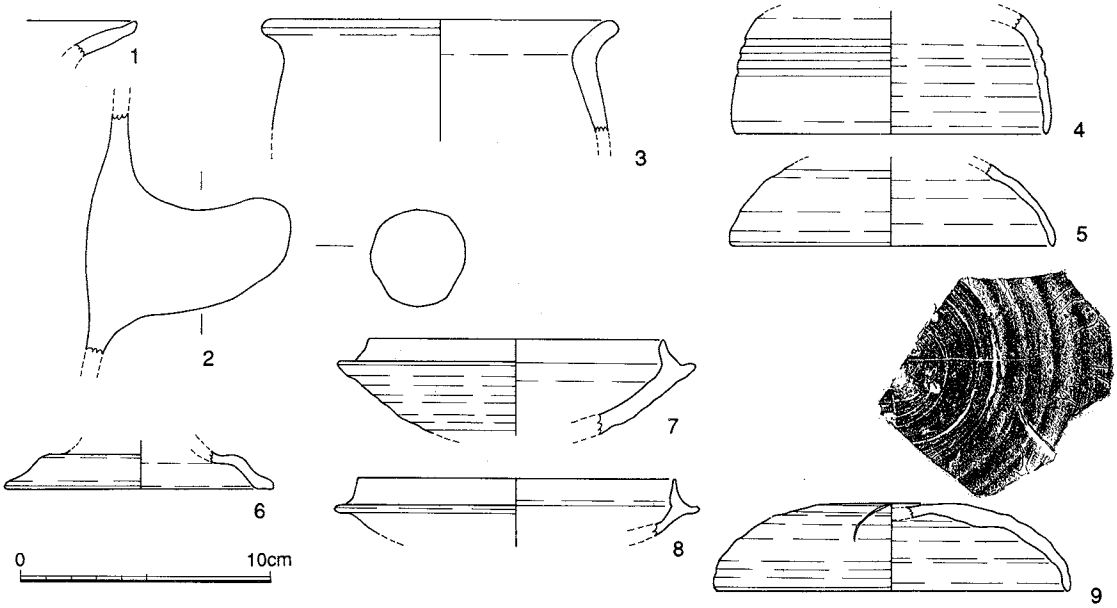


Fig.17　柱穴出土遺物実測図(1／3)

センチ前後をはかる。

柱間は、東辺で１６０センチ、南辺で１４５センチである。柱筋は、ほぼ真北にとる。

柱穴から出土した遺物を、Fig.17—2・8・9に示す。2は、**土師器**の甑の把手である。実測図には断面のみを示したが、指押さえで成形されている。P－１９から出土。8・9は、**須恵器**である。8は坏身で、横ナデ調整される。P－２０出土。9は、坏蓋である。天井部は回転へら削り、体部は横ナデ調整される。天井部に、十文字のへら記号が刻まれている。P－０８から出土した。

これらの遺物からみて、７世紀初めと考えられる。

３号掘立柱建物跡

調査区南端近くで検出した掘立柱建物跡である。東側・南側が調査区外に出るため、全体の規模はわからない。柱間は、北辺で２４０センチ、西辺で２７０センチをはかる。

柱穴からはほとんど遺物が出土しておらず、時期の決め手を欠く。

その他の柱穴出土遺物

上記の柱穴以外から出土した遺物の内、図示に耐えるものをFig.17—１・４・５・６に示す。１は、**古式土師器**の甕の口縁である。器壁が磨滅しており、調整痕は残っていない。P－１４出土。４・５・６は、**須恵器**である。４は、蓋である。横ナデ調整で、体部外面には３条の平行沈線を巡らす。P－３４から出土。５は、坏蓋である。天井部は回転へら削り、体部は横ナデ調整する。１号掘立柱建物跡の柱穴を切るP－２４から出土した。６は、脚の裾部である。横ナデ調整する。P－３４出土。

Ⅲ　まとめ

本調査で検出した遺構は、古代の掘立柱建物跡と中世の溝状遺構である。

掘立柱建物跡は、７世紀初め頃の建物と考えられ、柱筋を南北にとる。とりわけ、１号掘立柱建物跡は、桁行７間以上、梁間２間（梁間中央は柱穴を欠く）の大型建物である。

これと組み合わせになると思われる建物が、第３７次調査において確認されている。細長い調査区の端近くで、東西の柱の並びを調査したもので、建物の体裁は不明である。柱穴の規模・形状は１号掘立柱建物跡と共通しており、同時に存在した一連の建物と考えられる。とすれば、規則的な配置をとった大型建物群が、一定の面積を占めて配置されていたと推測できる。これだけの検出例だけで即断するのは危険であるが、居館もしくは官衙的な施設の可能性を考えたい。

中世の溝状遺構は、空壕と考えられるものである。屈曲部は、撹乱のために検出できなかったが、遺構の延びていく状況から、Ｌ字形に折れ曲がった一連の溝（壕）と推測できる。断面形と埋土の状況から、大きな掘り直しが、少なくとも一回はあったと見られる。出土遺物からその時期を見ると、最初の壕は１３世紀の初め頃に掘られ、１４世紀頃まで次第に埋まりながらも存続していたと思われる。掘り直しは、１５世紀代になされたが、おそらく１６世紀には埋まってしまっていたであろう。

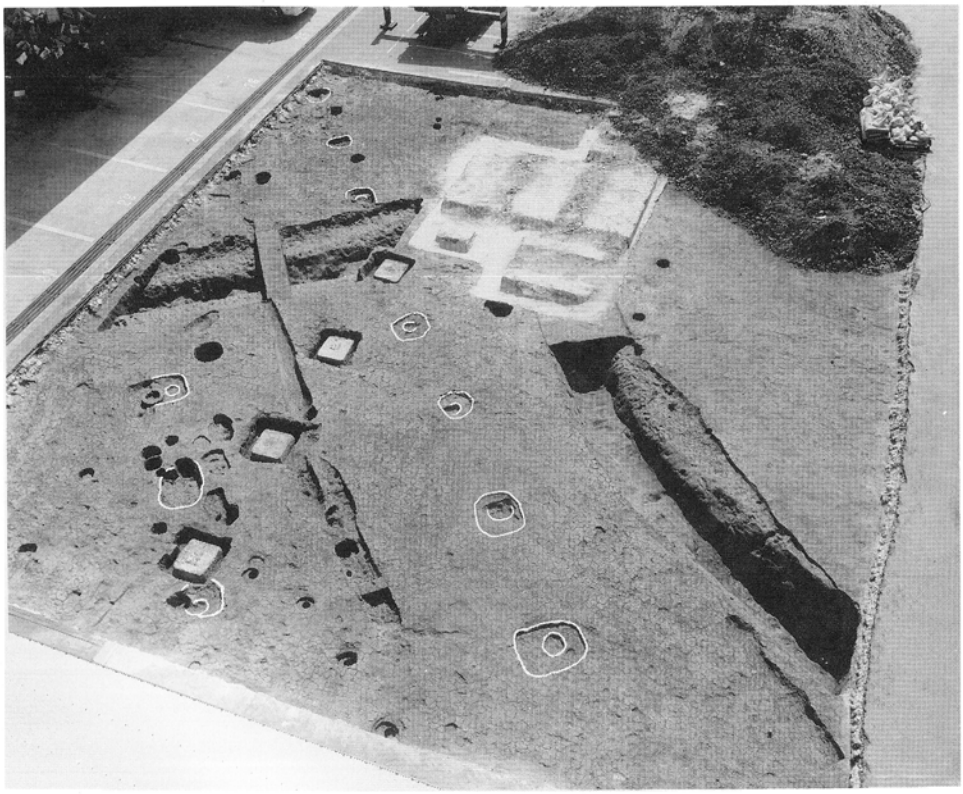
前述した第３７次調査では、本調査の溝１につながるとみられる溝が検出されている。１２世紀中頃の溝とされ、本調査の下層の時期とは若干ずれるが、継続時期の幅を見れば、同時存在として支障はない。中世の居館をめぐる壕と考えることができようか。

参考　　『那珂　１１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第366集　福岡市教育委員会　1994

図　　版

（ＰＬＡＴＥ）

1．第５６次調査全景（南西から）



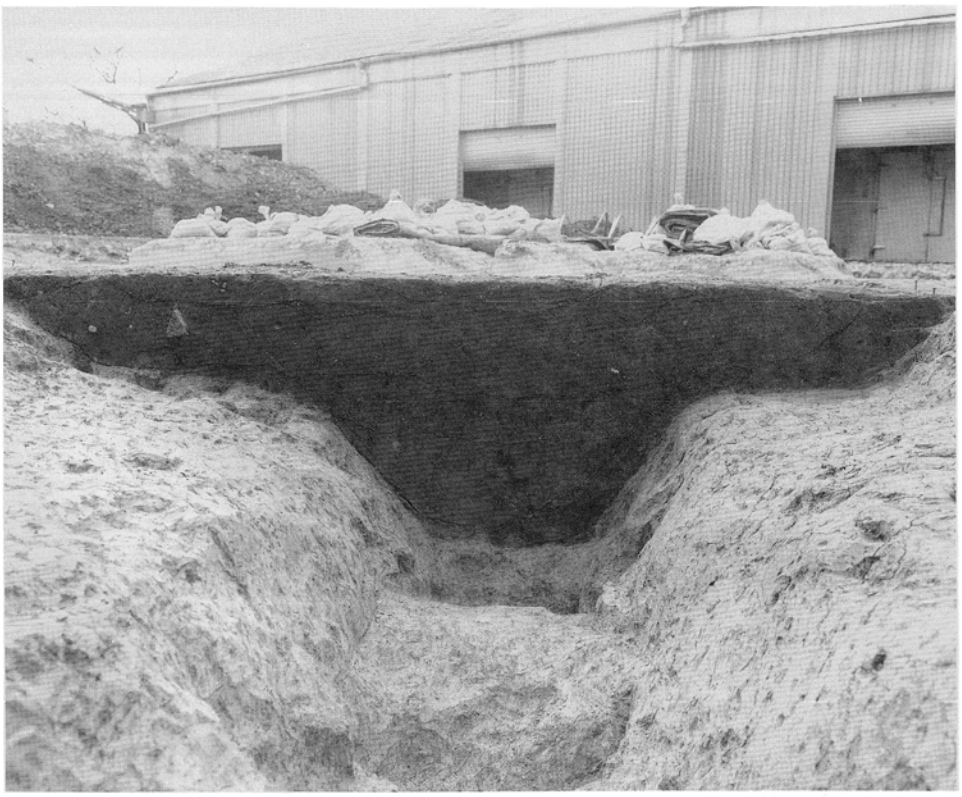
2．第５６次調査全景（北から）

PL. 6

1．溝１完掘状況（北から）

2．溝１土層堆積状況（北から）

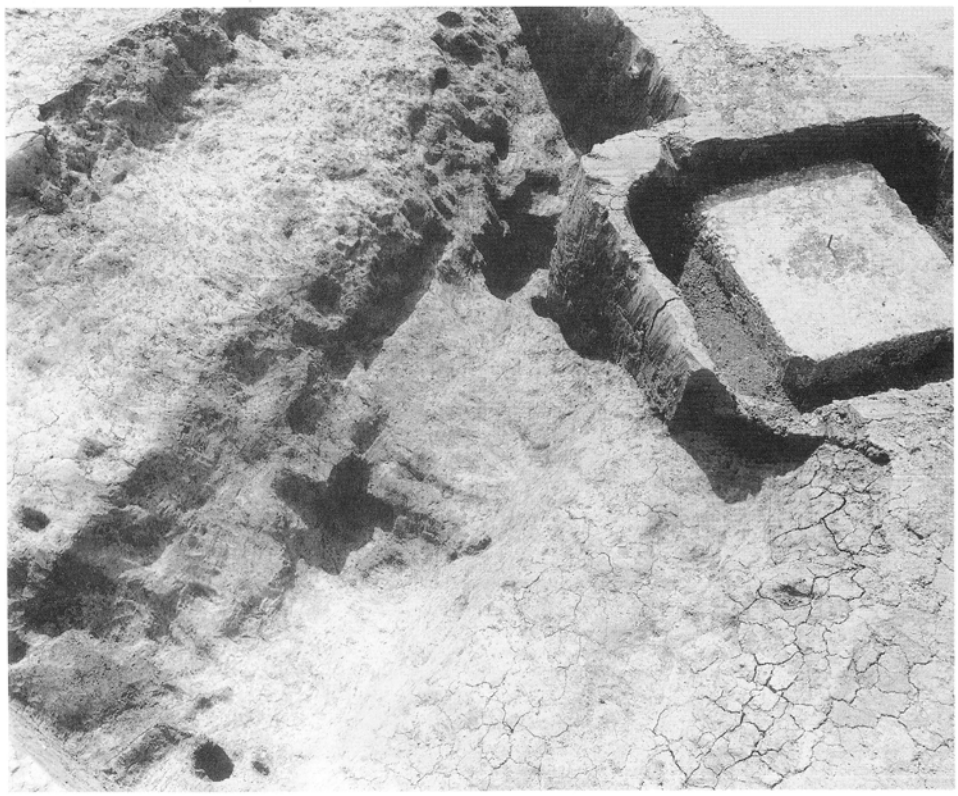
1．溝２完掘状況（西から）



2．溝２土層堆積状況（東から）

PL. 8

1．溝２底柱穴状遺構（東から）



2．溝２底柱穴状遺構（北東から）

福岡市

那珂17

－那珂遺跡群　第５５次、第５６次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第500集

1997.3.31

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印刷　㈱嶋井精華堂
福岡市博多区吉塚１丁目34－３